

先月初旬、とうとう石巻でも新型コロナウイルスの感染者が確認された。東京観光の直後に発症したという。私は5月に約9年暮らした石巻から東京に居を移したが、団体の事務所は石巻に残しており、頻りに石巻に通うつもりでいた。先月の4連休も石巻行きを計画していたが、「コロナが東京から石巻に持ち込まれた(可能性が高い)」ことから、当分は石巻行きを諦めざるを得ない。

予想はしていたが、感染者の特定は早かった。市の発表から4時間後には職場や家族構成、家族の職場までもが、石巻にいない私の耳に入ってきた。ある人は第1号が自分でなくてよかったと心の内を打ち明けた。地方のコミュニティの怖さを知った気がした。コミュニティといえは、石巻市内には約4500戸の災害公営住宅がある。さまざまな地域から人が集まる災害公営住宅では、ゼロから新たなコミュニティが形

座標



成されたが、今も多くの課題を抱えていると感じる。私たちの団体では、災害公営住宅向けに無料情報紙を発行し、手渡しで配布する活動を行っている。配っていると、「鉄の扉に遮られ、世界でたった一人になったように感じる」「こんなに寂しい思いをするなら、仮設住宅の方がまだよかった」「引越して1年たつけれど、茶飲み友達どころか顔見知りもできない」という声をよく聞く。

災害公営住宅でのコミュニティ形成はなぜ難しいのか。理由は幾つかあるが、私がハツとしたのは仮設住宅で親しくなった高齢女

失敗許し合える社会に

性の言葉だ。「災害公営住宅は最後まで暮らす場所だから、人間関係で失敗できない。最初から仲良くならなければ、トラブルになることもないのよ」。一歩踏み込んだ人間関係はトラブルのリスクと紙一重。ならば、最初から親しい付き合いを避けたいというのだ。

「人間関係で失敗できない」という気持ちは、先の「石巻の感染者第1号が自分でなくてよかった」にも通じるものがある。共通するのは、「一度下されたネガティブな評価は簡単には覆せない」という認識だ。固定化したコミュニティであればあるほど、ステイグマ(烙印)を抱えた状態で生きていくのは困難になる。

「生き心地の良い町」(岡檀著)によると、自殺希少地域の徳島県海部町(現海陽町)では、「一度目はこたえられ(許してやれ)」という理念が共有されている」という。換回のチャンスがあると思えること、やり直しができると信

地方コミュニティ

じられることが、生き心地の良い社会を形成しているのだ。震災でコミュニティが失われた地域で、新しいコミュニティを再構築するのは容易ではない。しかし、固定化したコミュニティがなくなった今は、生き心地の良いコミュニティを作るチャンスと言えるかもしれない。ただ、時間だけが解決してくれる問題ではないのは確かだ。固定化したコミュニティを持たない外部支援者として、できることがあるとも感じている。一日も早くコロナ禍が収束し、また石巻で活動できる日が来ることを心から願う。

石巻復興きずな新聞舎代表
岩元 暁子
(東京都練馬区)